

小鹿野町

～町の伝承文化・歌舞伎を通じての認知症の理解を深める取り組み～

(1) 小鹿野町の概要

(ア) 小鹿野町の基本情報

小鹿野町は埼玉県西北部に位置し、東は秩父市、西は群馬県上野村・神流町に接する。江戸時代中期より伝わる小鹿野歌舞伎の町として有名で、昭和 50 年には県指定無形文化財、52 年に県無形民俗文化財に指定された。子ども歌舞伎、女歌舞伎、歌舞伎保存会をはじめ、町民参加型の「入門教室」など、「町中が役者」といわれるほど歌舞伎が町民の生活に浸透している。歌舞伎を町の文化使節として県内外に派遣する「地域間文化交流事業」も盛んだ。こうした歌舞伎を中心とした、伝統文化による町おこしが認められ、平成 5 年度には県「ふるさと彩の国づくりモデル賞」を、9 年度には「潤いと活力のあるまちづくり自治大臣表彰」を受賞した。

また、小鹿野町は「花と歌舞伎と名水のまち・おがの」のとおり豊かな自然に囲まれる。平成 17 年 10 月の合併により、県内の町村では面積が 171.45km²と最も広い町域を有する。

年少人口および生産年齢人口の減少が進むなか、特に、中山間地域（山間の畑地等）における人口減少が目立ち、限界集落も存在している。老年人口は増加しており高齢化率は 28.8%と高いが、平成 20 年度は高齢者一人当たりの医療費（75 歳以上医療費）は県内で一番安く、県平均(786,278 円)を約 23 万円も下回ったことで注目された。

町では高齢化社会に向け、保健・医療・福祉が連携し健康づくりを推進するため「健康の町宣言」を平成 3 年に行った。地域包括ケアシステムの取り組みや精神保健活動が認められ、平成 16 年には「保健文化賞」を受けるなど、昔から住民の健康づくりに力を入れている町である。

① 面積	171.45km ²
② 人口	13,572 人
③ ②のうち 65 歳以上人口（再掲） ※【 】内は高齢化率	3,910 人 【28.8%】

(平成 24 年 1 月 1 日現在。町(丁)字別人口調査)

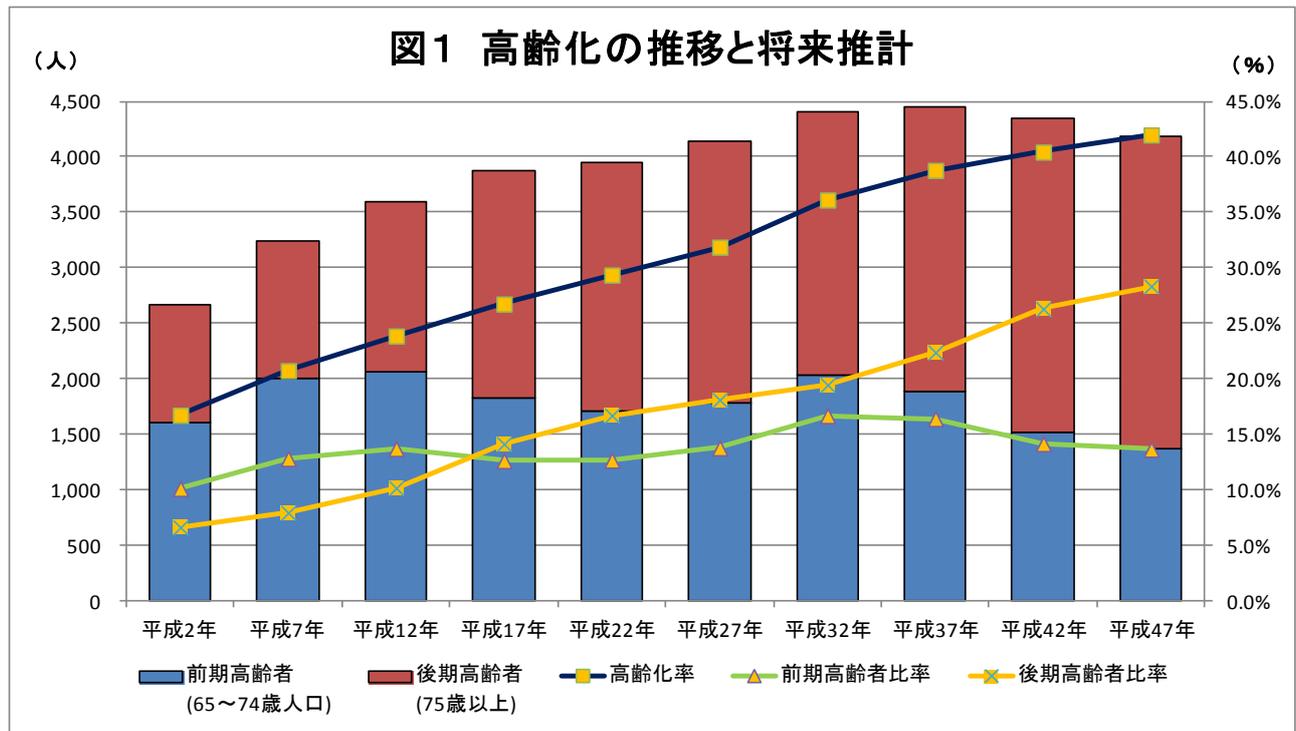
(イ) 人口分布概要と見込み

小鹿野町では、平成 23 年 1 月 1 日現在で高齢者人口は 3,910 人、高齢化率は 28.8%と全国平均の 23.1%や埼玉県平均の 20.0%を大きく上回る。今後もさらに高齢化が進むことが予想され、平成 47 年では 42.0%に達する見込みである。

表1 高齢化の推移と将来推計人口

年	国勢調査人口					将来推計人口				
	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	平成32年	平成37年	平成42年	平成47年
総人口	15,901	15,628	15,061	14,479	13,436	12,985	12,213	11,461	10,733	9,978
前期高齢者 (65～74歳人口)	1,607	2,002	2,064	1,827	1,701	1,788	2,036	1,880	1,518	1,361
後期高齢者 (75歳以上)	1,052	1,239	1,530	2,045	2,243	2,350	2,375	2,565	2,822	2,828
高齢化率	16.7%	20.7%	23.9%	26.7%	29.4%	31.9%	36.1%	38.8%	40.4%	42.0%
前期高齢者比率	10.1%	12.8%	13.7%	12.6%	12.7%	13.8%	16.7%	16.4%	14.1%	13.6%
後期高齢者比率	6.6%	7.9%	10.2%	14.1%	16.7%	18.1%	19.4%	22.4%	26.3%	28.3%

平成22年までは、国勢調査人口
平成27年以降は、『日本の市区町村別将来推計人口』(平成20年12月推計)(H17国勢調査から推計)



(2) 小鹿野町の取組

(ア) 取組の概要

小鹿野町は、高齢化がすすみ介護の現状から認知症の対応が課題であり、平成 21 年度から補助事業を継続し重点施策として取り組んできた。

施策の一つとして認知症の理解を深めるために、町内にある自主活動歌舞伎サークルうぶに依頼し歌舞伎風芝居を上演した。この取り組みについて報告する。

(イ) 取組の契機

① 高齢化率の上昇

65歳以上の人口は平成3年には16%を超え高齢化への対応として包括ケアシステムの構築に努めてきた。

② 介護の現状

要介護の原因として、筋肉・関節などの疾患、脳血管疾患、認知症などが上位に上げられている。以前の調査と比べ、認知症の割合が増加傾向にある。

③ 高齢者の生活状況

小鹿野町は老人クラブ発祥の地とされ高齢者同士の活動が盛んであり、介護予防事業への参加や声かけもしやすくなっている。また、農作業での働く意欲やおすそ分けなどを楽しみとし、高齢者自身が自分の居場所をもち、近隣や地域など規模毎に自分のネットワークを持っている人が多い。

④ 文化の継承・地域の状況

祭りや伝統行事などからしっかりとした地縁組織があり、年をとっても世帯間交流や役割があると認識している人が多い。

また、民生委員や保健補導員などの地域での見守り体制もできている。

(ウ) 取組の内容

事業名 市町村認知症施策総合推進事業「認知症について考えるつどい」

事業開始年度 21年度から継続

実施体制 主催 小鹿野町保健福祉課

協力団体 歌舞伎サークルうぶ 社会福祉協議会

予算 国庫補助10/10

参加人数 370名

(エ) 取組の効果

① 取組の中での変化

町では地域で声をかけあったり、助け合うことはお互い様の精神として自然に受け継がれている。行政側が改めて町の強みとして再認識することができるとともに、町民自身も当たり前と思っていることが「わが町の良い所」と気づき、共有することができるようになった。

② 演技者の考え

町から依頼を受けた側から、町民自身が望む、目指したい地域のイメージを具体的に描き、表現することで、地域に伝える発信者となった。行政からの押し付けのイメージではなく、認知症について自分のこととして考えるようになった。

③ かかわりのある高齢者

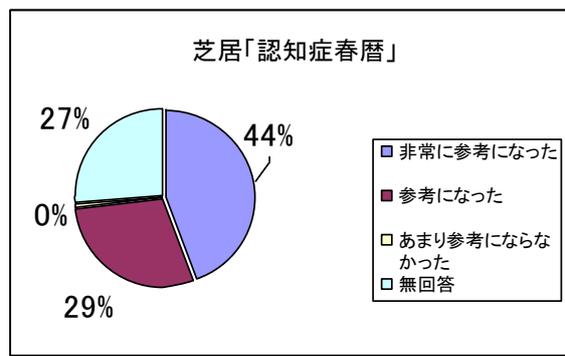
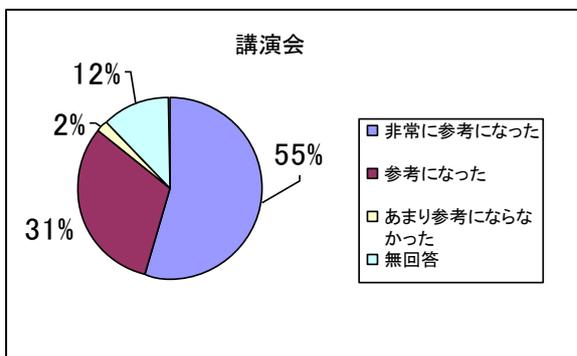
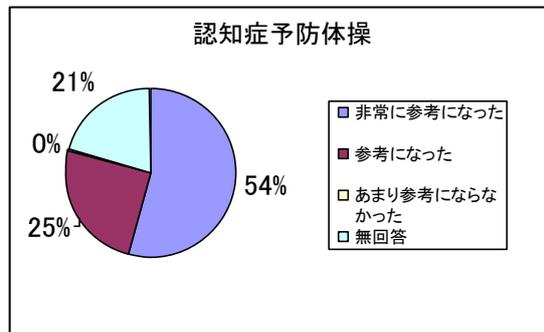
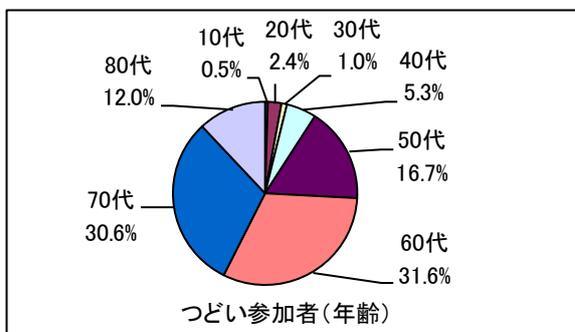
役者の中には高齢でもまだまだ元気に現役の方もいらっしゃった。当初は「認知症になったら困るし、家族も困らせる。認知症になりたくない。」とマイナス面の発言が多かった。練習を重ね、認知症について仲間と一緒に考えを重ねることで、「まだまだ若い人に自分の技術を伝えたい。」と、前向きな発言も見られるようになってきた。

④ 介護者

- ・ 芝居を通じて認知症の家族の対応を学んだ。
- ・ ついつい同じことを繰り返されるとイライラしていた。
- ・ 大声で否定していたが、「ゆっくりでいいから。いいよ、大丈夫だよ。」という講師の方の言葉が心に響いた。
- ・ 認知症について誤解していた。理解を深めることができた。また、物忘れが目立ってきて、どのようにしていったらいいか不安だった。一人で悩まずに相談することが大切なことと、相談できる場所があることを知ることができた。

⑤ 見た方の意見 アンケート

- ・ 講演会で認知症について理解を深めることができたと多数のご意見をいただいた。
- ・ 芝居を通じて対応の仕方を学ぶことができて助かった。
- ・ 身内、近所でのお互い気づきあい、助け合うことが大切と感じた。
- ・ どこにでも起こることである。自分の身の回りを温かく見守りたい。
- ・ 芝居が楽しく、面白かった！とてもわかりやすかった。とても良かった。
- ・ 楽しい中に、認知症の方の姿を見てよく理解できた。
- ・ 周囲の人々の理解ある姿勢がいかに大切か痛感しました。
- ・ たくさんの友人とあっちこっち出かけたり、食事をしたりしようと思いました。
- ・ 具体的に表現していただいて、よくわかった。
- ・ 芝居のように自分も認めたくないのかもしれない。わかっているけど実際はその場ではできなかった。
- ・ 小鹿野町に暮らせてよかったですと思います。



⑥ 町にとっての効果

伝統芸能として地元根付いている歌舞伎をモチーフにすることで、町民に馴染みやすさを出し、幅広い年齢層の町民に関心を持ってもらうことができた。また、役者は地元の警察官や商店、議員など様々な年齢と職種の人が行なっている。保健・福祉・介護の分野の垣根を越えて、同じ町民として伸び伸びと「小鹿野町らしく」、楽しく、認知症について地元の人たちと共に考えることができた。

(オ) 成功の要因、創意工夫した点

- ① 伝統ある歌舞伎の世界があり、役者や保存会の方々の想いを尊重した。
- ② 認知症について、地元生活している町民の目線と、専門職としての考えを、演劇を作り出す中で繰り返し話しあって作り上げていった。
- ③ アドリブが多く、本番でも何が飛び出すのか、ハラハラしていたが、信頼して腹をくくった。
- ④ 演劇終了後に、認知症の高齢者役の二人に「まだまだ若いものに伝えなきゃなんねえもんがある。」と舞台上でセリフを言っていただき、「認知症になっても、自分らしく、役割をもって、いきいきと生活してほしい」という想いを伝えるようにした。
- ⑤ 最後に保健福祉課や社会福祉協議会の職員も一緒に踊り（かつぼれ）を踊ったり、下座をするなど芝居に参加することで一体感を出すようにした。（役者からも町の職員も一緒にやったらどうかと提案があった）アンケートからも「かつぼれで心がひとつになったのではないかと。とてもよかった。」と好評をいただいた。
- ⑥ 芝居を補足するパンフレットを作成し、より深く理解できるように心がけた。

(カ) 課題、今後の取組

今回の取り組みの目的は「認知症について幅広い町民に関心を持ってもらい、視覚を通して認知症の知識や認知症の人への対応の仕方を学び、正しい理解を広げる」ことにある。来場者で歌舞伎サークルうぶの芝居に関心があったという方もおり、幅は確実に広がったと手ごたえを感じている。しかし、今回の取り組みを、部分的な取り組みで終わらせることなく、どのような形で活かしていくか、今後の取り組みの継続性が課題であると考えている。



歌舞伎サークル うぶ 齋藤 勝代 (67歳)

実際に認知症の人の役を演じる中で、介護する家族の大変さを感じました。この芝居で一人でも多くの人に認知症の理解が広がればいいと思います。

歌舞伎サークルうぶに参加して、若い人たちと一緒に歌舞伎や踊りをしていると元気でいられます。若さを保つ秘訣かもしれない。これからも頑張っ続けていきたいです。

